揖斐郡教育研修センター通信　第１７号 ＜各校送付・１月町校長会資料＞

３学期の揖斐郡教育会及び郡教育研修センター事業

月	運　営	学　校　教　育　事　業				
		児童生徒文化事業	研究	研　修	広　報	教育相談・適応指導
1		図美展 清水小体育館で審査会→オンライン作品展 ふれあい作品展 （各校ごとに実施）	③２１　教育研究総会 リアルタイムオンライン配信で実施　　内容は ・教育実践論文表彰式（WEB） ・研究発表、講評（WEB）　・講演 ・優秀論文執筆者によるシンポジウム 各校でオンライン配信の準備をお願いします。 ※郡優秀論文を岐大実践論文募集に応募		町広報誌原稿提出 ④研修センターホームページの新たなる活用法	２８保護者会⑥ （ほほえみ相談員）
2	9行事調整委員会 14センター運営委員会 R3年度の成果と課題とR4年度に向けて 25行事調整委員会			⑤令和4年度郡研究員事業の再開に向けての取組 2月1日に各校へ依頼文書送付	読書感想文集 いびの子のからだ第68号 各校へ3部ずつ配付：活用を教育情報いび１０３号	１８保護者会⑦ （ほほえみ相談員）
3	３センター役員会 ※R4年度郡研究員事業について		11論文研修会 研修統轄、校長会研究部長、実践論文応募予定者 授業ライブラリー作成Ⅱ		実践論文集 優秀賞・入選の論文を掲載 執筆者・各校へ配付	指導者会

授業ライブラリーの提出が現在１校しかありません。多くの学校から出していただけるようお願いします。

	事　務　局　事　業			
	学校保健会	PTA連合会	教職インターン制	体育協会
1	27「いびの子のからだ」編集委員会②	14　西濃P合同会議④		14第2回常任理事会 西濃理事会
2	10「いびの子のからだ」編集委員会③ 16　三師会と養教との交流会 大野町民センター大会議室で	3県P評議員会③ 9郡市P担当者会 14郡P企画委員会④ 母親第2回委員会 28郡P評議員会②		18表彰式（児童生徒対象） 郡スポーツ懇談会 けんこう広場
3	9　理事会④（R4県大会実行委員会④） 「いびの子のからだ」第68号発刊 ※結核対策調査結果の収集整理	会計監査 11県P役員理事会②		県評議員会 7理事会③

令和３年度　第２回ほほえみ教室教育相談研修会

令和１２月２１日（火）　　参加者：２７名（保護者：１４名　教職員：８名　センター主幹・ほほえみ指導員：５名）

講演　「感情コントロールが困難な子どもたち」
医療法人杏野会　各務原病院　臨床心理士・公認心理師　井上　修一　先生

■講演の概要　　感情コントロールが困難な子どもたち
感情とは？感情コントロールのメカニズム　　感情制御の発達不全モデル

■子どもをどう見立てるか。
個としての成長発達という視点から　　関り方に問題はないかという視点から

■感情コントロールが困難な子どもたちとは

すぐキレてしまう。　落ち込みが激しい。
急にテンションが上がってしまう。　いじめ・自殺企図・リストカット・依存
→青年期以降の複雑性PTSDにも関係していく

■そもそも感情とは
うれしい　楽しい　びっくりする
怒っている　悲しい　嫌だ　こわい
喜び・悲しみ・怒り・嫌悪・恐怖・驚き　→６つの基本感情

■感情はどこで生まれるのか。
感情は、大脳辺縁系（哺乳類の脳）で生まれる。
感情をコントロールしているのは、大脳新皮質（人の脳）
ただし、両者は影響を及ぼしあっている。

■感情コントロールってどうやって獲得するの？
体の成長と同じように、脳が成長して獲得していく。
体と同じように、環境との相互作用の中で成長していく。　例）汗腺の発達　ＬとＲの聞き分け

■感情コントロールも、同じように環境の影響を大きく受ける。
特に乳幼児期、子どもはいろいろな出来事が、“危機”となることがよくある。
“危機”の状態になると、泣き叫んだり、不機嫌になったり。

■安全・安心のもと感情を出すことが　できる状態があると、　不快感情は、少しずつ収束していく。

■安全・安心のもと感情を出すことができる。
○うれしい　楽しい　びっくりする　×怒っている　悲しい　嫌だ　こわい

■感情コントロールが難しい子は？
危機の状態なのに、その不快感情を認めてもらえず、安心・安全感が得られない。→危機回避できない。
→原始的防衛反応
３つのＦ：闘争（Fight）・逃走（Flight）・固まる（Freeze）　結果、負情動が収束しない。

■感情制御の発達不全モデル　不快感情を表現（泣く）

■虐待や体罰系による子育て→闘争・逃走反応の強化　キレる　逃げる
叱責・否定→感情コントロールが困難に

■過剰に「よい子」を求める子育て→固まる（解離）の強化　解離が常態化
ほめ・肯定　問題を内包した「よい子」に

■問題行動や症状が生じると　家族や学校は、なんらかの関わりを行い問題を解決しようとすると
問題行動や症状が改善され、安心して生活できるようになる。
改善されなかったり、かえって問題が増幅されている。　の２つの場合がある。

■子どもの問題行動や症状を出発点にして捉えなおす
過去の関わり（環境）と個の特性（個人内）→成長発達システム
問題が生じて以降の家族や学校の関わり　→問題増幅システム

＜仮想事例から＞
幼少期に広汎性発達障害の診断あり　通常学級に在籍しているが、感情コントロールが難しい
教室から飛び出していくこともある　怒りだすと、モノを投げたり、大声を出したり
・問題増幅システムへのアプローチ①　親⇒子ども
不快感情の大切さを伝え、感情の社会化を促進してもらうえるような働きかけ
・問題増幅システムへのアプローチ② 学校⇒子ども
不快感情の大切さを伝え、感情の社会化を促進　発達特性へのアプローチ
・問題増幅システムへのアプローチ③　子ども
特性の自己理解を児のペースでトラウマへのアプローチ（場合によっては医療と連携）

＜参加者の感想＞
- 通級担当の教員としてどのように子どもを理解し、指導していくとよいかを勉強させていただきました。
- 改めて子どもとのかかわりを考えせられた。反抗期なのでなかなか難しいが、今何を思っているのかを察して声かけしたいと思いました。
- 闘争・闘争や解離等の問題行動がある時、教師としての自分が原因を作っているかもしれないという視点を常にもつことが大切であり、視野を広げて子どもを見立てることを勉強させていただきました。
- 教員が聞かせていただくと大変参考になるお話だと思いました。支援の仕方についてもう少し詳しく知りたかったです。
- 児童が６つの基本感情をわかっているのか、思いやりをもつという二次感情をもっていいるのかを確認したいと思いました。また子どもの見立てについての話を聞き、子どもの深い感情を否定するのではなく、安全・安心な環境が提供できるよう努めたいと思います。